



サマル・ヤズベク（著）柳谷 あゆみ（翻訳）『歩き娘』表紙より

---

## 講演録

---

# シリアの祖国、文学、女性

——小説『歩き娘』を入口に

講演 サマル・ヤズベク

司会 岡真理 モデレーター 岡崎弘樹 新刊紹介 柳谷あゆみ 通訳 森晋太郎

2024年6月16日（日）

早稲田大学 小野記念講堂

---

主催：科研費基盤研究（A）「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」（研究代表者：岡真理）／科研費若手研究「近現代アラブ思想・文学における「共存」構想とその実践」（研究代表者：岡崎弘樹）／早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「拡大するムスリム社会との共生：歴史的背景とグローバル化」／早稲田大学中東・イスラーム研究コース

# Samar Yazbek | サマル・ヤズベク |

---

1970 年、シリア・ラタキア県ジャブラ生まれ。1999 年、短篇集『秋の花束』を刊行、文筆生活に入る。

アサド大統領と同じくイスラーム教アラウィー派の一族の出身でありながら、2011 年以降、一貫して反アサド政権の立場をとり、逮捕・拘束を経て同年夏にシリアを脱出。小説家、シナリオライター、編集者、ジャーナリストとして活躍する一方、女性を支援する NPO 団体を設立。



2009 年、39 歳以下の優れたアラブ作家「ベイルート 39」の一人に選ばれる。2011 年に始まったシリア蜂起の最初の四か月の日記に基づく長篇小説『交戦』を 2012 年に刊行。英訳は同年の国際ペンクラブのピンター文学賞「勇気ある国際的作家」を受賞した。

2015 年に『無の国の門』（白水社）を刊行。20 か国で翻訳され、仏訳は 2016 年度フランス最優秀外国文学賞（エッセイ部門）を受賞した。2017 年に『歩き娘』を刊行、12 か国で翻訳され、仏訳は 2018 年度フェミナ賞（外国小説部門）最終候補作、英訳は 2021 年度全米図書賞（翻訳部門）の最終候補作に選ばれた。最新作は 2021 年の『風の立つ場所』。パリ在住。

---

ワタン研究プロジェクトでは、人間と「ワタン/Homeland」の関係を人文学的視座からグローバルに考究しています。2024 年 6 月 16 日（日）、プロジェクトの一環として、サマル・ヤズベクさんをお招きし、「シリアの祖国、文学、女性——小説『歩き娘』を入口に」と題し、早稲田大学にてご講演いただきました。その内容を加筆・修正の上、ここに採録します。

## サマル・ヤズベク氏講演

# シリアの祖国、文学、女性 ——小説『歩き娘』を入口に

司会 岡真理 モデレーター 岡崎弘樹 新刊紹介 柳谷あゆみ アラビア語通訳 森晋太郎

岡：シリア人小説家サマル・ヤズベクさんの講演会「シリアの祖国、文学、女性——小説『歩き娘』を入口に」を始めさせていただきます。みなさん、日曜日の暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。本日、講演会の司会を務めさせていただきます、早稲田大学文学学院の岡真理と申します。

この講演会は、私が代表を務めます科研プロジェクト「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」（通称：ワタン研究プロジェクト）、および——今回サマルさんを招聘されました、ワタン研究プロジェクトのメンバーでもある岡崎弘樹さんの——科研プロジェクト「近現代アラブ思想・文学における「共存」構想とその実践」、そして早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「拡大するムスリム社会との共生：歴史的背景とグローバル化」、早稲田大学中東・イスラーム研究コース、この4つの組織による共催となっております。共催をご快諾くださいました人文研そして中東・イスラーム研究コースに心より御礼申し上げます。

ワタン研究プロジェクトについて少しご説明しますと、2020年に科学研究費の補助金を得まして、2023年までの4か年のプロジェクトでした。2023年が最終年度だったのですが、昨年度招聘予定であったサマルさんのご来日が延期になったことで、今年度も活動をしています。中東を中心に、ドイツ・フランスなどヨーロッパ、そして北米、それからラテンアメリカ等の地域を超えて、現代世界における人間と「ワタン」、ホームランドの関係性について考えるというプロジェクトです。

それでは、サマルさんのご講演に先立ちまして、今回サマルさんの小説『歩き娘』の日本語訳をされました、翻訳者である柳谷あゆみさんに小説『歩き娘』についてご紹介いただきます。柳谷さんは東洋文庫研究員であると同時に、本学でアラビア語を非常勤で教えてくださっています。これまでに、アラブ・ブッカー賞を受賞した『バグダードのフランケンシュタイン』<sup>1</sup>、またサマルさんの『無の国の門』<sup>2</sup>などの日本語訳を手掛けておられます。それでは柳谷さん、よろしくお願いします。

柳谷：ご紹介ありがとうございます。柳谷あゆみと申します。よろしくお願いいたします。

<sup>1</sup> アフマド・サアダーウィー『バグダードのフランケンシュタイン』柳谷あゆみ訳、集英社、2020年。

<sup>2</sup> サマル・ヤズベク『歩き娘 シリア・2013年』柳谷あゆみ訳、白水社、2024年。

今回、『歩き娘 シリア・2013 年』<sup>3</sup>の日本語訳刊行をきっかけにヤズベクさんが来日されて、初めて直にお会いできて本当にうれしく思っています。これからみなさんも対面されると思いますが、大変ハンサムな女性で、私もこれからのお話をとても楽しみにしております。今回の講演会をセッティングくださったみなさま、それからご来場くださったみなさまに厚く御礼申し上げます。

『歩き娘 シリア・2013 年』は 6 月に入ってから刊行ということで、まだお読みになっていない方も多いのではないかと思います。私は 4 年前にヤズベクさんの記録文学『無の国の門』を翻訳していますが、今回の『歩き娘』は『無の国の門』とテーマ的にはかなり共通するところがあり、2011 年以降のシリアという同じテーマを扱っていますが、アプローチは全く違っています。そのあたりも含めて、『歩き娘』を自分がどのように読んだかということを紹介させていただきます。

まず簡単に、サマル・ヤズベクさんの来歴について紹介します。サマル・ヤズベクさんは 1999 年に作家としてのキャリアをスタートし、2009 年には——現在のアラブの文学・小説を見る上で面白い取り組みが行われていまして——当時 39 歳以下の、これからを担う（既に活躍されている方もいましたけれども）有望なアラブ作家 39 名を選出したイベント「ベイルート 39」の一人に選ばれています。つまり、デビュー以来、サマル・ヤズベクさんは作家として常に第一線に立っていたわけですが、2011 年に始まったシリアのアサド政権に対する反体制・改革運動「シリア革命」に参加し、逮捕・拘束を経てシリアを出国しました。そして 2011 年以降はご自身の経験や取材をもとに執筆した記録文学的な作品、『交戦』<sup>4</sup>『無の国の門』『19 人の女たち』<sup>5</sup>などを刊行しています。その一方で、女性支援の NPO 団体を立ち上げ、社会活動家としても積極的に活動しています。

私が 4 年前に訳しました『無の国の門』は、2012 年から 2013 年にかけて、サマル・ヤズベクさんがシリアに三度、密入国の形で帰国したときの記録です。このときサマル・ヤズベクさんはアサド政権の支配の外にある「解放地域」に入ったのですが、戦況の悪化もあって急速に地域の状況が変わってしまい、以後の帰国を断念するまでが克明に記されています。今回の作品も含め、二冊の本を翻訳した際に私が得た印象では、サマル・ヤズベクさんはとても繊細な感性を持っていて、厳しい状況にあっても、非常に細かい、小さなものまで目に留めて、心に留めておくことができる方です。非常に語彙が広く、とても深い言葉で、苛烈な現況を見つめ続け、それを長篇という形で表し続けることができる。長篇というのは非常に難しいと思うのです。そこまでを練り上げなくてはいけないので。繊細で、かつ非常に強靱な胆力を持たれた方だと私は思います。

---

<sup>3</sup> サマル・ヤズベク『無の国の門: 引き裂かれた祖国シリアへの旅』柳谷あゆみ訳、白水社、2020 年。

<sup>4</sup> 未邦訳。英訳として Samar Yazbek, *A Woman in the Crossfire: Diaries of the Syrian Revolution*, Haus Publishing, 2012.

<sup>5</sup> 未邦訳。仏訳として Samar Yazbek, *19 femmes - Les Syriennes racontent*, POCKET, 2021.

『歩き娘 シリア・2013 年』について簡単に紹介させていただきます。『歩き娘 シリア・2013 年』は、2013 年のダマスカス郊外に起きた出来事を下敷きとしながら、サマル・ヤズベクさんが数年ぶりにフィクションとしての文芸創作に復帰した作品にあたります。特に 2010 年代、シリアに関してはいろいろな作品が出ましたが、多くは記録的なもの、ドキュメンタリーだったと思います。それだけに状況が厳しかったと言うこともできます。つまり、一度自分の中に入れて、創作として出すまでの余裕を持てなかったという状況もあるかと思います。そこを経て、フィクションという形で、さらにもう一段階進んで表されたのが今回の作品ということになります。

非常に面白いといえますか、不思議な設定になっていまして、主人公は十代後半の女性です。ただ彼女は生後間もなくから、自分の意思に拘わらず足が歩きだしてしまうという奇癖を持っています。また幼い頃の経験がもとで、自分の声は出せるし、本の音読などはできるのですが、自分の意思を発話で表現できない発話障害もあります。そのため、学校教育を受けることができず、しかも年頃になってからは主な活動場所が自宅だけになっていました。さらに、歩き出してしまうという癖があるので、勝手に歩き出してしまうないように、常に手首を紐のようなもので拘束されているんです。外出するときには家族、家の中にいるときにもどこかに必ず結び付けておく、常に拘束されている状況にある、そういう設定の主人公です。

そのようなわけで主人公は人との接触が非常に限られているのですけれど、理解者であるスアード女史の個人教育を受けることができ、豊かな知性と想像力、芸術的な才能をどんどん自分の中ではぐくんでいきます。

2013 年の夏、主人公は母親と久しぶりに外出したときに、不運な事件から母を失い、自らも負傷してしまいます。そして仲の良かった兄に引き取られるのですが、連れていかれた先は自宅ではなく、違うところです。そこは度重なる爆撃にさらされています。そういう状況に置かれて、最終的に主人公は印刷所の地下室に、手首を拘束されたままひとり取り残され、一本だけ見つかった青いペンを手に取り、誰ともつかない「あなた」に手記を——自分が今までどうしてきたか、どうして今こういうことになっているのか——綴っていくのです。この本はその手記にあたります。

最初の設定の不思議さもありますし、展開が非常に理不尽で、何が起きているのかと思われるかと思います。『無の国の門』とは対照的に、具体的な情報、それから記録というものが排除されているのです。彼女は知識のない状態でその状況に陥るわけですから、情報がない個人の視点から当時のシリアの異常な状況を描いた作品ということができます。非常に不思議な作品なのですけれども、背景を知り、読み重ね、気づきを得ていくたびにどんどん解像度が上がっていく作品だと思います。

すべては紹介できないのですが、ここでは本作の舞台である 2013 年の夏に何が起きていたかを紹介しておきたいと思います。2013 年の初頭に、反体制派武装勢力によってシリアの首都ダマスカスの郊外にあるグータという地区が制圧されました。この動きに対して、アサド政権はこの地区を封鎖して爆撃するという包囲戦を展開していきます。このグータ包囲があったことが分かると、徐々に主人公の状況が見えてくる

かと思います。主人公のお兄さんは、反体制活動に参加していたので、主人公を引き取った際にグータ地区に入っていたのです。グータ地区では、封鎖による物資不足と爆撃化学兵器による攻撃も行われ、多数の民間人が死傷したという事実があります。

本書の主人公は、このグータで手首の拘束と、閉じられた部屋、女性であるが故の行動制限、さらに都市自体の封鎖という幾重もの拘束を受けています。他方で主人公自身は、最初は無関心であった外の世界に対して接点を求め、交流するようになり、そして最終的には誰とも分らない、知らない「あなた」に向かって自分のことを伝えていくことになります。主人公自身の内面がどんどん開いて、そして伝わっていく。この封鎖と解放という二点の対比が、非常に興味深いと私は思いました。

そして、この本では主人公の読書経験も手記として語られるのですが、主人公自身が今までどういう本を読んできたか、これから読まれる方はおそらく共感されるところもあると思います。よく知られた『星の王子さま』<sup>6</sup>や『不思議の国のアリス』<sup>7</sup>から始まって、大変難解なサアーリビー<sup>8</sup>の『言語学』まで主人公は読破していて、しかもそれを読んでいく中で、自分ならばこうしたいといった二次創作的な発想があったりしたことも打ち明けてくれます。この本には非常に困難な状況が描かれていますが、それ以上に、主人公自身の内面世界がとても鮮烈な印象を残してくれる作品だと思います。

戦況の悪化に伴い、彼女の周りの人たちはどんどんいなくなってしまう。人がいなくなるというのはどういうことか、そして自分もいずれはいなくなってしまうのではないかとこのところまで主人公は考えていきます。この「いなくなる」ということが、当時そして現在に至るまでシリアで次々と起こっていることでもあります。人が亡くなる、もしくは国の外に出てどんどんいなくなるということ、それは、本当にいなくなってしまうのか、と。

ただ、主人公が書いたものが伝わる限り、どこかに主人公は残る。そういう希望を見出すことができる作品だと私は思っています。

今回の翻訳は本当に難航を極めて、担当編集者の方には大変なご迷惑をおかけしました。もし読みにくさがあったらそれは偏に訳者の未熟さのせいかと思います。それでも、それを超えて、この本を読んでいただけたらと思います。ありがとうございました。

岡：柳谷さん、どうもありがとうございました。それでは、みなさんお待たせいたしました。サマル・ヤズベクさんにご講演いただきたいと思います。対話形式で、対話の相手として岡崎弘樹さんに、そしてアラビア語逐次通訳はアラビア語の翻訳家であり通訳者である森晋太郎さんをお願いいたします。それでは、みなさん、拍手でお迎

---

<sup>6</sup> アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ『星の王子様』新潮文庫、2006年。

<sup>7</sup> ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』角川文庫、2010年。

<sup>8</sup> サアーリビー (al-Tha‘ālibī : 961-1038) : イランのニーシャープール出身のムスリム文献学者。

えください。

岡崎：みなさん、どうもこんにちは。シリア政治・文化、アラブの近代思想を専門としております、亜細亜大学の岡崎弘樹と申します。普段は講演形式で原稿があってそれを読むという形で行われるのですが、サマルさんとお話ししたところ「対話形式を望む」ということでした。質疑応答のときに、今日来てくださった方々との対話も行います。日本に来た以上やはり対話形式でお願いしたいということで、当初の予定を変更しまして私に対談相手になってお話を聞こうと思います。

柳谷さんの方から既にサマルさんの経歴についてはご説明がありましたので、直接的にいろいろと聞いていきたいと思います。今、シリアに関する報道というのはほとんどなくなってきました。世界の報道はやはりガザ、パレスチナで起こっていることに注目しているわけですが、2013年とは言え、今起こっていることとやはりつながっているとは思いますが。サマルさんも実はガザの問題にも関わっているということで現代の問題ともつなげるうえで、手始めにこの2か月半くらいでサマルさんがガザの問題に対してどのように関わられてきたのかについてお聞きしたいと思います。

サマル：ありがとうございます。ガザで10月7日以降起こった出来事について、最初的时候、私は家族の事情でカタールのドーハにいました。そのとき1600人もの人びとがガザから手足を切断された状態で運び込まれてくるということがありました。私はフランスに戻るまで2、3か月くらいの時間があつたのですが、虐殺から逃れてきたパレスチナの避難者たちの集まるところに出向いて、記録を残すということを決めました。そして「欠如」というテーマについて書く、本にするということを決めました。

私はこの本の中で、虐殺、ジェノサイドの経験をどのように描くか、どのように語るかということを試みました。彼らが手足を失うという、そしてまたその手足を埋めるということをどのように経験したかについて語ろうと努めました。

これは小説ではなく、ドキュメンタリーなのですが、彼らの記憶や人生を言葉で紡いでいくということ、ナラティブを紡いでいくということに非常に心を砕いていました。

岡崎：ありがとうございます。ということで、今日先ほど柳谷さんから紹介していただいた『歩き娘』、そして同じ時期を扱った『無の国の門』も、まったく同じような状況の中で書かれたものなので、いろいろと現在につながってくると思います。それでは、サマルさんのこれまでの人生の流れをお聞きしたいです。講演などでは「私は17歳くらいのときに家を出た」とおっしゃって、作家として身を立てようと思ったということで、そのときの経緯についてお聞きしたいと思います。

サマル：シリアで1985年から1991年の時期というのは、左翼運動の終わりの時期だ

ったと思います。それは私の思春期の一部にあたり、その時期に活動していました。その時代の反抗する若者たちの一人として、そのような時期を過ごしていました。当時、ハーフェズ・アサド大統領の時代で、左翼運動への参加者や進歩的な人々、民主化を求める人々は逮捕され、数十年にもわたり拘束されるという状況がありました。その中で私は、自由というのは言葉だけではなく行動で、そしてまた女性としても自立するということを通じて、これを実践していかなければならないと思っていました。ただ、このことは当時においては大変なことでした。それは大きな出来事で、スキャンダルとでも言うべきことだったのです。

私が執筆を始めたのは 1995 年で、ずっと恐竜時代のように昔の話なのですけれども、最初に出版されたのは短編集（『秋の花束』）で、それが 1999 年でした。そのあと 2000 年に『女のことば』という短編集、2003 年に『空の娘』という小説を刊行しました。スライドに挙げられている『粘土』（2005 年）は、（アサド体制下の）軍と宗派主義体制というテーマについて扱った小説です。これを書いたことで私の生活も変わりました。つまり、この作品を書いたことで、秘密警察や治安機関に対する恐怖を覚えるようになったのです。

同時に私はジャーナリストでもあり、映画やドラマのシナリオも書いていました。2000 年から 2011 年までの間というのは、ジャーナリストとしてシリアの身分法や憲法における女性の地位について関心を持って取り上げてきました。託児所の問題、女性の教育の権利、結婚、国外渡航に関する自由といった、さまざまなテーマについて関心を持って取材を行いました。そういった中で、ダマスカス郊外におけるいわゆる「貧困ベルト」と呼ばれる地域があり、そこで取材を行い見聞きしたことが『シナモンの匂い』（2008 年）<sup>9</sup>という小説作品につながりました。要するにジャーナリストとしての仕事の産物として、小説が生まれたのです。

2000 年代は、私たちは希望を失った時期でした。政治面では 2000 年にハーフェズ・アサドが死去しましたが、息子のバッシャール・アサドに権力が不法な形で世襲されました。若い大統領による改革に希望を抱きましたが、一斉拘束が始まりました。政治の状況がいつそう悪いという真逆の現実を、そのとき私たちは知ったわけです。その中で私は『シナモンの匂い』という作品を書きました。というのも、私たちの社会の中に黙ってはいけない政治的でもある切実な問題があると考えたからです。その小説は、メイドとして働く貧しい娘が女主人に性的な虐待、搾取を受けるという話です。それを社会的には女性の同性愛の問題だという語られることもありましたが、実際にはそれは富める階級の女性による、惨めで貧しい階級の女性に対する搾取に他ならなかったのです。

この作品に関しては社会的には評判はかんばしくありませんでした。そのあと広く読まれるようになりましたけれども、それでも誤解、間違った形で理解されました。女性同士の性的な関係に対し好奇の目で見られてしまったということがありました。

---

<sup>9</sup> 英訳として Samar Yazbek, *Cinnamon*, Haus Publishing, 2013.

ですが、この作品ではダマスカス郊外における「貧困ベルト」、そして貧富の格差における社会的矛盾を生み出す政治、その問題性を批判的に取り扱った作品だったと考えています。

岡崎：治安機関にも目を付けられた、それでも社会革命を目指したということでした。実は 2011 年以前というのは、サマルさんも国営テレビのドラマのシナリオを書いていたということでしたが、多くの作家は実は公務員であったり、体制の枠組みの中でその余白の中で、どのように社会を変えていくかという状況にありました。やはり小説に関しても、読者はある程度限定されていました。したがって作家は、それを意識して、しかし芸術的に、文学的に練り上げていくという手法をとっていたように思います。

ところが、今日話題となっている『歩き娘』に加え、記録文学の形式で書かれる『交戦』や『無の国の門』については、読者が変わっていました。要するに、2011 年以降、戦争や大きな弾圧があった中で、読者は限定された一部のアラビア語読者層ではなくて世界の人々であるという条件が自明となったと思います。まさにその当時革命に参加されたサマルさんが、自分の作家としての役割、また、どのような読者を想定して、新たな活動を始められたのかについて教えてください。

サマル：その質問に感謝します。2011 年以降私の役割が変わっただけではなく、私の生活も変わりましたし、シリア全体が変わりました。小説家としての語りの技術に加えて、記録をする、記録をして語るという別の面を新たに重んじるようになりました。私はもともと女性としてアイデンティティの多面性を持っていたわけですがけれども、2011 年以降はその亀裂がさらに深まったことを感じました。非常に激しい暴力が広がっていく中で、2011 年から 2016 年にかけての 5、6 年間は文学作品を執筆できずにいました。極めて困難な状況でした。

しかし、非常に大きな、重大な問題の前に私がいるということを意識しました。自分の国の人々が虐殺されている事態を目の当たりにして、私は自分の務め、自分がしなければならないことを感じるようになり、世界中で、シリアで起こっていることについて語るということを始めました。私は作家として、芸術家として、繊細な人間としては、自分自身に反することでした。

私は記録文学を書き始めたわけですがけれども、それは私にとってすごく難しい、困難なことでした。何かを書くとき、書くことによってその人は解放されるということが言われますけれども、私の場合はむしろ逆で、書くことで、その書いている内容が自分の内側にどんどん入ってくる。長い戦争について、虐殺について書くことによって、それがさらに自分の中に入ってくる。自分があたかも墓場であるかのように。私はサマル・ヤズベクという名前ですがけれども、「サマル・ヤズベク」は墓場になってしまうというような感覚にとらわれました。

ですが、私は自分の営み、自分のやっていることに非常に満足、納得をしていまし

た。というのは、これは唯一の方法だと感じていましたし、今もそう考えています。こういった考えは古いと言われるかもしれませんが、作家としての役割とか、知識人として、シリアという国に生まれた者として、正義と真実を言葉を通じて探し求めるといったようなことです。とても辛い経験であったけれども、私は自分のしていることにとても満足して、むしろ内なる平安すら、この営みを通じて得ていると感じます。

2011 年以降に新たに始めた仕事というのは、文学だけではなく、どのように語るか、どのようにナラティブを作り上げていくのかということでした。それは小説ではなく物語のような形で語る、あるいはドキュメンタリー、記録文学の形で、あるいはジャーナリストとして、あるいは活動家として、語り方というのを探す、模索することです。文学ということは別に記録するために書くということを自分の中で強く意識するようになりました。そしてそれは今、ガザについて同じ大義として自分が取り組んでいることの一つでもあります。

岡崎：圧倒的な虚無主義、人間の価値が徹底的に否定され、アサド体制からもイスラーム過激派からも否定され、世界からも否定され、しかしその中で記録として書き残したものは爆撃の中でたくましく助け合っている人びとだと思いますけれども、そういう人間の姿自体もサマルさんの作家としての書くモチベーションになったということでしょうか。

サマル：『無の国の門』について言いますと、最終的には一冊の著書として刊行されたけれども、その内容は何度かに分けて、エッセイという形で書かれたものでした。私はシリアに数度にわたり帰還をしていたわけですが、そのエッセイの形で書かれた文章というのも大義を擁護するといったことのために書かれていたわけです。

というのも、アサド政権は、「犯罪者を殺している」のだと主張していたわけですが、実際には、平和的に始まったデモを弾圧し、その参加者たちを野蛮に暴力的に殺すということが起こっていたわけです。そのことに対して反駁をするために書いていたという側面がありました。実際、私がシリアに帰還していた時期にも、アサド政権の軍隊は街々を戦闘機で爆撃していたのです。たとえば、日本の自衛隊の戦闘機が東京を空爆するということが考えられますか。信じられないことです。そういうことが起こっていたのです。

何度か戻っていたというのも、最終的に帰還を果たそうと思っていたわけですが、2012 年初頭に入ったときも北部に暮して、執筆を行おうと思っていたわけですが、また出て行かざるを得なくなりました。体制側による市街地への爆撃もありますけれども、IS がシリア自由軍を全滅させたということもあって、出て行かざるを得ませんでした。

人びとの抵抗のあり方というのは、私も本の中で詳細を書きましたけれども、本当にさまざまな形がありました。抵抗のあり様というのは非常に多様で、たとえば武器を取って戦闘を行うであるとか、イスラーム過激主義者の登場であるとか、そういう

ステレオタイプな見方は後に始まったのであって、実態からほど遠いものでした。後になって地域の大国や国際的な勢力がアサド体制側に利するような形で入ってくることによって情勢が変化し、シリアは「世界大戦」とは明確に言わないけれども、事実上の世界的な戦争との舞台になってしまったわけです。しかしシリア人の抵抗のあり様というのはもっと多様なものでありました。

岡崎：ありがとうございます。では、いよいよ今回日本語に翻訳された『歩き娘』の話になります。小説を書けなかった、ところが書くのを決めたのは、どういう経緯でそうなったのかお聞きしたいと思います。

サマル：実際のところ、決心したというわけではありません。『無の国の門』の後は病気になってしまって、背骨の痛みが激しくなり、ほとんど麻痺といってもいいくらいで、6か月くらいの間動けずにいました。そのあと『歩き娘』を書くというアイデアが出てきたのですけれども、その理由は二つあります。

一つはそのように動けなかったこと、そして二つ目はある出来事があったことです。私が最後にシリアに行った時期の2013年8月21日に、化学兵器による大量殺戮が起きました。それを記録することに取り組んでいましたけれども、弁護士でありジャーナリストであり活動家である友人ラザーン・ザイトゥーナとスカイプで連絡を取り合っていたのですが、その後彼女は、「イスラーム軍」に拉致され、彼女とサミーラ・ハリール、ワイル・ハマード、ナズィム・ハマディーといった仲間たちと一緒に拉致され、行方不明となりました<sup>10</sup>。

私は化学兵器による虐殺の詳細について調べていましたが、仲間が失踪して、拉致をされて、何年もの間連絡がとれない状態でした。そのうち私は病気で動けない状況から癒えて、そのタイミングで彼女のために『歩き娘』を書くことを思い立ちました。ダマスカス郊外ザマルカで起こった化学兵器による虐殺という出来事についても書くというアイデアを思い立ちました。

私はその頃、文学に対する見方に変化が表れ始めていて、化学兵器による攻撃、虐殺といったことで1,800人（推定）もの人々が亡くなったという出来事、その恐ろしい瞬間を、直接的な暴力、流血の描写なしにいかに描くことができるかについて考えました。想像力の力で暴力と戦争に抵抗するということを考えました。そこから『歩き娘』のリーマーという主人公のキャラクターが生まれてきました。そしてリーマーは今も私の中にいます。

私は何年にもわたりシリアでの恐ろしい出来事についての記録を実践してきたわけ

---

<sup>10</sup> ラザーン・ザイトゥーナは、シリアの人権派弁護士でシリア革命地域調整委員会設立メンバー。サミーラ・ハリールは人権活動家で、作家ヤシーン・ハージュ・サーレハの妻。ワイル・ハマードも人権活動家でラザーンの夫。ナズィム・ハマディーも人権活動家。この4人は2013年12月9日に、ダマスカス郊外で勢力を伸ばしていたイスラーム武装組織「イスラーム軍」によって拉致され、以後行方不明となっている。

ですけれども、小説の執筆を再開する中で言葉遊びに関心を持ち、言葉との関係も変わってきました。そうした中でリーマーという娘のキャラクターが生まれてきて、包囲下で虐殺にさらされる中で、彼女が現実と想像の関係の中でパズルを解くように言葉に接する姿を描こうと思ったのです。

私は文学を通じて、従来とは異なった語り方を模索してきました。前提となる知識のないままのまなざしで、包囲や虐殺をどのように見て語りうるのかを描くのかということです。たとえばリーマーは言葉の中で生きている少女で、実際に起こった虐殺を彼女は色彩を通じて語るわけです。色彩のみについて語り、暴力を見ずして虐殺について語るわけです。そういう新たな語り方の模索です。

岡崎：暴力を暴力的でない言葉で語れば、想像力や比喩に満ちているということになります。体のみが勝手に動くといった主人公の設定についても、柳谷あゆみさんが解説をしてくださいましたが、読者の想像力を広げることにもつながります。今、色彩についておっしゃいましたが、本当に視覚的なイメージが膨らむように、星のきらめきやすみれ色の空、それぞれのキャラクターの衣服、スーパーボールなどについて、すべて色彩で語られている。これも小説家として計算づくで書かれていますね。

サマル：リーマーはそもそも暴力を経験しているということを知らず、ただ自分の生を生きています。しばしばあることは、犠牲者は自分が犠牲者であることを分かっているということ。それは実際にあることです。リーマーはそういう経験をして、何が起きているのか分かっているのです。それが本質です。

私は、言葉は無力だと思っています。そういう倫理的な問いを立てていました。自分がこのような惨劇について書くというのは、どういうことなのだろうか。私は何者なのかと問い続けました。『歩き娘』を書いているときも、出来事を言葉で描写することはできないと理解しました。突如として 1,800 人もの人々が化学兵器で殺されるような世界を書くことができるのでしょうか。広島の人々が味わったであろう経験を、言葉で描写し尽くせるのかと思いました。激しい暴力を描写するためにはやはりファンタジー、空想が必要なのではないかと思います。

文学というのは記録的な物語とは違います。私は記録という形でも、たとえば『19人の女たち』という証言集でも化学兵器の攻撃について書きました。けれども、そこでもその描き方というのは文学とは違って、文学においては内実、つまり言葉の後ろ側にあるものが大事なのです。他の作家たちがどうしているのかよく知らないですけれども、私が思っているのは、文学というのはその読者を他者の立場に置くということ、そのことによって人間的な共感が生まれる、それが文学の役割であり、文学の切実な、そして重大な務めだと思います。

岡崎：一番大事なポイントにたどり着いたところで、今日会場に来てくださった方との対話の時間も取りたいと思います。休憩をはさんで、今度は会場のみなさまとの質

疑応答の時間にしたいと思います。

## 質疑応答

---

岡崎：来日したのは今日来たお客様と対談するため、それが主たる目的ですので、どうぞ率直になんでも聞いてください。では、お願いします。

質問者 A：一つ質問させてください。（サマルさんのお話に関連して）『アラブの女性解放論』<sup>11</sup>に関連することなのですが、これは私がジェンダーなどについてきちんと学んだことがないので何とも言えないので非常に程度の低い質問かもしれないのですが、女性が解放された場合、つまりその女性が解放されるという理想的な状態が実現した場合、家父長制的な中で生きたいという女性は淘汰されてしまうのでしょうか。私はどちらかというの家から出たくないですし、家父長制的な中で生きたいと思っています。今の日本だと女性の活躍が推進されることによって、なぜか社会で働かなければいけなくなってしまう。非常につらいので、できれば解放されたくないという気持ちがあるのですが、どうしたらいいのでしょうか。

サマル：ご質問ありがとうございます。もちろん、そのご意見は尊重します。いかなる社会においても、憲法において個人の自由を尊重することが謳われるべきです。たとえばヒジャーブ（ヴェール）の着用を、あるいは着用しないことを強制してはなりません。働くことを強制する、あるいは働かないで家にいることを強制することがあってはならない。重要なことは、両性の平等、そして個人の自由が、憲法（原理原則）において、法において保証されなければなりません。

現在の新しい社会はポスト自由主義で、男性であれ女性であれ社会において働くことが強いられる時代にあると思います。消費社会の中で、女性も男性と同じように働かざるを得ず、女性の解放という問題とは無関係です。そこでお尋ねしたいのですが、日本の憲法や法律では女性が家から出て働かなければならないと定められているのでしょうか。

質問者 A：いえ、そんなことはありません。

サマル：ということは、あなたが何をするかというのは自由だと思います。

質問者 A：大変詳しいご回答をありがとうございます。

岡崎：その問題をまさに『アラブの女性解放論』の解説で書きました（笑）！というの

---

<sup>11</sup> カースィム・アミン著『アラブの女性解放論』岡崎弘樹・後藤絵美訳、法政大学出版局、2024 年。

も、「解放」という言葉がイデオロギー化しているのです。サマルさんは、いわゆる西洋フェミニズムの考え方をそのままアラブの国々に適用するのは間違っているとお考えだと思いますが、それについて一言お願いします。

サマル：私たちが立ち上げたシリアの女性支援団体“Women Now for Development”のネットワークにおいても、私たちの社会のあり方、伝統的な社会のあり方の中で生きている、それぞれの状況の中で生きている人たちと一緒に漸進的に取り組んでいくことを重んじています。いわゆる西洋のフェミニズムのあり方とは違うのです。

さらに言えば、私たちの生きているのは戦争が起こっている地域です。そこで民主化の革命を行ったけれども、潰されてしまった。そういうところに私たちは生きています。その中で、たとえばシリア北西部のイドリブでは、女性たちも体制側の爆撃や、ロシアやイランによる爆撃に常にさらされています。そこで問われるべき、模索されるべき優先事項というのは、ヒジャーブを付けるか付けないのかといったことではなく、どうやってその状況の中で生きていくのかということです。ですから、それはガザにおいても同様だと思いますけれども、アラブ世界の女性運動における優先事項というのはそういったものです。

私の活動の中でのひとつのメッセージは、戦争を止める、パレスチナ人の虐殺はやめろというものです。「Me too 運動」はフランスにはあるけれども、私たちの活動の中では「Me too 運動」というものはありません。

岡崎：いきなり本質的な議論で、私も楽しいです。それでは他にはいかがでしょうか。

質問者 B：大変興味深いお話をありがとうございました。質問は2つあります。まず1つ目は、ヤズベクさん、初めの頃はシリア国内で書いて、出版していたわけで、ここ10年くらいフランスに住んで、書くのはアラビア語でしょうけれども、英訳・仏訳、今は日本語訳もあるということですから、この10年ほどとそれ以前とでは、ヤズベクさんにとっては読者の位相というのが大きく変わってしまっているわけですね。シリア国内にいて、基本的にはシリアの読者を相手にしていた時代、あるいはアラビア語話者を相手に書いていた時代と、この10年程のように、英語やフランス語やさらには日本語の読者が読むということが、今のヤズベクさんにとっては普通の状態になってしまっている。読者の位相が変わってしまったということが、ヤズベクさん自身の創作する際の意識や問題設定などに影響があるのかどうか。あるとすればどういう影響があり得るのか、お伺いしたいです。

サマル：まったく変わっていません。もともと革命前の私の書いたものもイタリア語やフランス語に訳されていました。私が執筆する際には翻訳についてまったく考えていなくて、私の考え方は変わっていないです。

質問者 B：2 つ目の質問です。先ほど『歩き娘』の解説をヤズベクさんにさせていただいたときに、言ってみれば、戦争や内戦という極限的な状況を前にして、語り得ないことをいかにして語るかというのは現代文学の大きな問題だと思うのです。かつてはルポルタージュ風の文学、ドキュメンタリー風の文学を実践していたヤズベクさんが、今回『歩き娘』の中で、まさにその語り得ぬものを語るために、ドキュメンタリーや調査ではなくフィクションを選んだ。そのことが大変面白いと思ったのです。

なぜ面白いと思ったのかというと、ヤズベクさんが今住んでいるフランスではむしろ逆に、作家の側がフィクションから調査、フィクションからフィクションならざるものへ移行する作家たちの流れがあるのです。それに対して、ヤズベクさんは語り得ないものをいかにして語るのかを模索するために、意図的にドキュメンタリーからフィクションに移っている、そんな感じを受けたのです。それを大変面白いと思いました。現代文学において語り得ぬものをいかにして語るのか、語り得ぬものをフィクションという形で表すことの意味、価値、争点というのを、ヤズベクさんがどのように考えているのか。もしフランスの状況などもご存じであれば、そのあたりのことも踏まえながら、お聞きしたいと思いました。

サマル：言っておきたいのは、私はもともと小説家なので 30 年前から小説をずっと書いてきました。しかし、革命や戦争によって記録の方に移ったということです。真実を語る、抵抗の営みとして、記録、ドキュメンタリーを書くようになったというのが実際のあり方です。20 歳の時から小説を書いていますし今はもう 55 歳ですけども、実際はそこから記録という形に移行したということをご承知おきいただけたらと思います。

岡崎：では続けて、ご質問をお願いします。

質問者 C：作家というよりは、社会活動家としてのヤズベクさんへの質問になります。日本ではシリアのことが本当に報じられていないのですが、報じられている中で私が印象的だと思っているのは、以前朝日新聞で一面を使って、シリアで政治犯の人たちを処刑する、その処刑の立会人を強制されている方のインタビュー記事でした。もう一つはツイッター（X）だったかと思いますが、今プーチン政権によるロシアのウクライナ侵略戦争が起こっていますけれども、そのことについてプーチンを止めるためにはアサドを止めなければならない、アサドを止めるためにはプーチンを止めなければならないというメッセージをシリアの方が発信されていて、とても印象に残っています。その上で、現在シリア内外で、アサド政権、あるいは背後にいるロシアやイランなどに対して抵抗されている方たちの中で、国際社会、国連、あるいは日本に対してもっとも求めていること、要求されていることというのは一体何なのかということを伺いたいと思います。

サマル：シリアの情勢について理解すべきことというのは、ウクライナやパレスチナの場合よりも報道が少ないことというのは、これだけの激しい戦争の状況がある中でも、シリアのことについては忘れるという決定がそこには存在するということだと思います。

2011年に平和的な抗議運動が始まりましたけれども、それに対してアサド政権は野蛮な弾圧を加えました。その後に地域諸国や世界の大国の介入が行われて、シリアは戦争の舞台となりました。表面上は「内戦」のように見えるけれども、その内実はというとシリアの天然資源を5つの占領勢力が分け合うことを目指していました。その5つというのは、①イラン、②ロシア、③トルコ、④アメリカ合衆国、そして⑤アサド体制そのものです。アサド政権も私は占領者だと考えています。

アサド体制は自らの地位を守るために複数の国々と結託をしたのです。今や各国の軍隊が今やシリアに駐留し、地中海沿岸地域にはロシア、北部にはアメリカやトルコの軍隊、南部にはイランの民兵がいるというような形で、それぞれがガス・石油・水資源を分け合うために結託しているのです。欧米とイラン、トルコはシリア人の安寧を守る、国内を安定させるという名の下に、新たな植民地主義を強いるということで合意しているのです。

バッシャー・アサドは戦争犯罪者ではありますがけれども、今や問題はそれ以上になってしまっています。域内外の大国がシリアの経済的な富を分け合うようになり、バッシャーは自らの地位を守るために国を売り飛ばすことを受け入れた。そういう状況の中で、この問題は国際的なレベルのことになってしまっているので解決するのは大変難しい。これが解決されるためには、欧米や地域の諸国が占領を止めて、シリアから出ていくこと以外にはあり得ないわけです。シリアは占領されているのです。

岡崎：少しつなげますと、そのような複雑な状況に私たちも何かしらの形で加担している、もしくは認識不足のままであるという状況にあります。今回のサマルさんのお話が何かにつながればと思います。

質問者 D：今日は本当に素晴らしい会をありがとうございます。『歩き娘』を3日で貪るように読みました。そういう表現が作品中にもあったかと思いますので。

私が聞きたいのは、どうやってリーマーがサマルさんの中で生まれたのかという点です。リーマーの描写はとても具体的で、それから突拍子もないのです。彼女が考えていることというのは、時に読者が混乱するようなことで、ついていけない時も結構あったわけです。それでも彼女のキャラクターは一貫性を持っていると思っています。サマルさんは先ほどリーマーは自分の中におっしゃいました。サマルさんはおそらく化学兵器の害を受けたことはないかと思いますが、そういうリアリティを含め、どうやってリーマーを生み出したのか、どうやってリーマーと一体となったのかというところを教えてくださいませんか。

サマル：それは私が小説家だということだと思います。付け加えたいのは、リーマーという存在それ自体がパズルといいますか、いろいろな側面から見ることができ、もしかしたらアラブのすべての女性たちがリーマーなのかもしれないです。

それから、小説のタイトルは『歩き娘』ですけれども、これはギリシャ哲学に遡ると、アリストテレスの弟子たち（逍遙学派）が歩きながら考える人たちだったのです。読みながらパズルのようにいろいろな側面から考え、読み解くことのできるキャラクターがリーマーなのだと思います。そしてリーマーは私にとっては、虐殺に抵抗するための手段、そういう存在でもあります。

作品の一つの柱というのは、人間の理性のあり方、理性との関わり合いといったことで、アリストテレスの弟子たちは歩きながら理性を働かせ、考えていた。リーマーは手を紐で結ばれているわけですが、でも歩かずにはいられない。さまざまなものによって彼女は縛られ、暴力や監禁、包囲された状態で手をつながれて、死にも直面し、幾重にも束縛されています。そしてシリアの地獄のような、悪夢のような状況の中で、それでも考えようとする。そういうこと自体が私の小説の柱になっています。

質問者 D：ありがとうございました。もう一度読み直してみます。では、柳谷さんに質問です。私が読んでいて難しいなと思う場面がたくさんあり、翻訳をされながら「これで合っているのだろうか」と不安になったことはありましたか。それでも、柳谷さんの翻訳と解説はサマルさんの世界観と一体感があって驚いたのです。その一体感をどう得られたのかということをお伺いしたいです。

柳谷：私は文学を専門的に深く知っているわけでないですが、翻訳家と作者の関係は、おそらく作曲者と指揮者の関係に近いと思っています。音楽はまず作曲者のものだと思いますが、指揮者は自分が創ったわけではないけれど、それを読んで、こう読んだ、というのを表現しなければならない。そこには解釈がもちろん入りますが、それは作曲者と離れてはいけないし、そうかと言ってくつつけるわけもない。それで、今回の『歩き娘』に関しては、本当に難しく、『無の国の門』とはまた別の意味で非常に難しく、編集者の方からいろいろと質問を出していただいて、それをもとに考え直す、といったこともありました。

常に考えるのですが、登場人物がどういった人物で、なぜそこにいて、なぜそういう属性を持っているのか。フィクションというのは人が創り出すもので、私の勝手な思い込みかもしれませんが、そこには必ず理由がある。理由のない人というのは文面には表れてこないと思うので、そこを探りながらやっていったということになります。その上で、リーマーは非常に難しい存在で、実を言えば、なぜ彼女がずっと歩くのかというのが私は長く分からずにいて、彼女が歩くということ、自分で発話できないということ、それがどういうことなのかを必死に考えながら訳していきました。しかも——これはみなさん、男女問わず経験されていると思いますが——状況に応じてどの

ような言葉を使うかというのが非常に難しいですね。今回は一人称の語り口調で、しかも若い女性であるということで、そこもさらに考えないといけませんでした。同じ言い回しでも、誰が言うかによって、俗な言い方になりますが印象がバカっぽくなってしまったり、すごく生意気そうになってしまったりすることがあります。なので、彼女はどのような人間で、私たちが会った時にどういう風に思うのだろうと。また、彼女のような人がその言葉を発したとき、どのように受け止められるだろうかと。考え続けたその部分をもとに解説を書いているので、サマルさんの世界観と一致していたとしたら、それはそのおかげかなと思います。ありがとうございました。

岡崎：もうお一方。どうぞお願いします。

質問者 E：ありがとうございました。早稲田大学の学生の者で、以前柳谷先生にアラビア語を習っていて、そのときにヤズベクさんのことを知りました。

自分は昨年10月以降、パレスチナの運動に関わってきた中で、圧倒的な虐殺を前にして自分が何かを書いたり、あるいは何かを読んだりすることが難しいということ、身をもって経験しました。何かを表現しようとしても、ものすごい虐殺、空爆が起こって、そのまた次の日にも新しいことが起こって、前の日のことでさえ何かを考えたり書いたりすることが難しく、また、物理的にも、授業に出て、デモに出て、署名活動を行って。そのようにしていると寝るだけで精一杯で、何かを読んだり、書いたりすることが大変で。ですから自分は、翻訳ばかりに取り組んでいました。翻訳は頭を使うのですけれども、自分で何かを頭で考えて表現するというプロセスが少ないと思うので。そういうことしかやっていなかったのです。うまく言えないのですけれども。

たとえば、デモに行っても何かプラカードを持って行こうと思っても、そのプラカードに何を書こうかと思うのです。虐殺を止めろと書くのは簡単なのですけれども、何か月にもわたって見聞きした人の死、壊された家、あるいはガザだけでなく西岸地区の人、エルサレムで壊された家、追い出された家など、そのすべて。今日までに70年以上、あらゆるものが蓄積していて、それをプラカード一枚に書けない、そのような小さいもので伝えることなどできない。それで自分はいつも他人のプラカードを借りたりしました。

そのようなときにヤズベクさんのこと、『無の国の門』が記録文学であったことについて思い出したのです。小説は一つのストーリーにして、物事を整理して、読者に伝えるように、理解できるような形で提示しなければいけないものだと自分は考えているのです。それは虐殺のさなかではできないと思いますし、だからこそガザで短編ばかり書かれている、スーダンや西サハラでも同じだと思うのですけれども、やはり長編小説というのは書ける人が限られているし、ものすごく大変だと思うのです。そういう中で、ヤズベクさんは何か葛藤がなかったのかどうか、お聞きしたいと思いました。よろしくお願いします。

サマル：あなたの怒りはものすごく分かります。私たちもまた戦争の申し子でした。小説を書いていなかった6年間も記録は続けていたし、記録のための文章というのは書き続けていました。けれども、おっしゃる通り、ショックを受けていた状態で、長編小説を書くためには距離、つまり6年もの時間が必要だったわけです。虐殺について記録をし続けるということは一つの闘いであって、あなたも活動をされる中で苛立ち、怒り、動揺し、そういったことの一つひとつが闘いだと思います。けれども、私が意識していたのは、他の人の痛みから目をそらさないということでした。それはずっと自分の中で心がけてきたことです。それが記録でした。

あなたは怒っているだけで何もしていないと感じているのかもしれませんが、あなたは多くのことをしています。他者に共感をするということを行っています。あなたは遠いところにいる人々、犠牲者のことを擁護するために活動を続けておられる。犠牲者を救うというのはとても難しいことですが、あなたがやっているそのことが極めて重要なのです。

岡崎：もう一人くらい最後に。では、お願いします。

質問者F：『歩き娘』の全部を読んでいないのですが、主人公のリーマーの設定について。シリアにいて、女性で、若いというだけではなくて発話ができない、身体的にも不自由があるということで、抵抗運動の外側に置かれているし、苦しい立場にある経験は他の人と同じではあるのですが、しかしその経験からさえも一段疎外されている、本当にゼロの立場にある設定だと思っています。ゼロの立場、一番弱い立場にある人も自由に感じられることというのが、本当の革命的な平和だと感想として思いました。

私はパレスチナに関して運動をしているのですが、スピーチを作るのが得意でよくスピーチをして、その中で性的マイノリティの人の解放、すべての人の解放のために闘っているということを、自分のスピーチをやっていてそのように信じています。けれども、そういう人の言葉を自分が直接話しているわけでもないですし、社会的立場も違うし、住んでいるところも違うし、話すこともない。ですから、そういう人の代弁をする資格がないのではないかと思うことがあるのです。せめてできることは、そういう人たちに誠実であることだと思うのですが、ヤズベクさんが書く中で、誠実であること、そして正しく代弁することの方法といいますか、心構えといいますか、それを知りたいです。

サマル：まず主人公のリーマーについてあなたが感じてくれたことというのは、本当に私が読者に感じてほしいことでしたのですごく嬉しく思います。彼女の弱さ、すごく繊細な人間で、体制でもなく反体制ということでもなく、本当に弱い一人の平凡な存在だと、そういうふうに見てくれたことは嬉しいと思います。

もう一つの、誠実さ、共感といったことについては、本当に私たちはこれまでの人

類の歴史の中でもないくらいに、誠実さ、共感を必要としていると思います。抑圧されたすべての人びと、性的なマイノリティ、宗教的マイノリティ、パレスチナ人であれ、虐殺にさらされている人たちに対する共感という価値こそが、残された最後の真実だと思います。

若いみなさんが街頭に出て、パレスチナのためにデモを行って、活動をしておられるということはものすごく大事なことだと思います。みなさんが行っていることは非常に重要で、それは日本だけではなく、世界各国でそうした抗議活動は行われていて、政府に圧力をかけている。このことの意味は大きいと思います。一つエピソードとして入れておきたいのですが、ニューヨークでのデモで、ユダヤ人の若い女性がネタニヤフ政権によるジェノサイドに関して言ったことというのは極めて重要なことでした。彼女はこう言いました。「私の祖父母は第二次世界大戦でドイツのナチスに殺された。そして常に自問する。私の祖父母の叫びを聞いた友人たちはどこにいたのだろうか。私は虐殺されている場面において沈黙するような隣人ではありたくない。私はユダヤ人として、パレスチナのジェノサイドに反対です」と、このように叫んだのです。そのことがとても印象に残っています。

岡崎：ありがとうございました。では、マイクを岡さんに戻します。

岡：では最後に、共催団体である早稲田大学中東・イスラーム研究コースの大稔先生から、閉会のご挨拶をいただきたいと思います。

大稔：サマルさん、どうもありがとうございました。私は早稲田大学文学部の中東・イスラーム研究コースというところの主任をしております、大稔と申します。

今日お集まりのみなさんのご関心、おそらく三方向から来ているように感じています。一つは女性の問題への関心。もう一つは文学の問題への関心。もう一つはシリア革命についての関心。この三つの方向からいろいろな関心を持った方々が集まって、サマルさんに線を結んでいるように感じます。私自身は、いわゆる「アラブの春」がありましたけれども、その直後からエジプト・カイロに住んで、タハリール広場に通っていました。革命前には、カイロのシリア大使の公邸前のデモに参加した経験もあります。

ヤズベクさんの文学的なお仕事というのは、「アラブの春」を文学的に表現する、文学的な実現の中の最も早い形のもの、成功例であると感じています。私はエジプトの作家たちとは交流があるのですが、彼らはまだこのレベルで実現していないと思います。アラブ世界全体を見回しても、最も早い部類の実現ではないかと感じています。

ここから話を早稲田の方に戻させていただきますと、早稲田大学は文学研究にこれまで力を入れてきて、早稲田には文学ミュージアムというのが作られています。文学ミュージアムと演劇ミュージアムという珍しいミュージアムがあります。そこには村

上春樹の部屋が再現されていたり、文学部の出身者などが取り上げられています。そういうわけで文学に熱心に取り組んでいる学部なのですから、そういう中で、早稲田大学にアラブ文学の拠点ができたらいいと思っています。みなさんにもご協力をお願いしたいと思います。

最後に御礼を申し上げたいのですが、岡崎弘樹さん、柳谷あゆみさん、森晋太郎さん、そして最後まで残ってくださいましたみなさんに感謝申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

岡：大稔先生、ありがとうございます。では最後にサマルさんから、みなさんに一言メッセージをいただけますでしょうか。

サマル：みなさん、本当に感謝しています。対話というものが共感を形作るための懸け橋になるということをもものすごく感じます。文化の間、あるいは文明の間の懸け橋になる。そして私自身がここにすることが、アラブ文学のためにとってもとても重要なことで、深く感謝したいと思いました。どうもありがとうございました。

岡：どうもありがとうございます。それではみなさん、3時間という長い時間、最後までお付き合いくださいましてありがとうございました。そして森さん、大変お疲れ様でした。

それでは、会を終了いたします。今日はどうもありがとうございました。

(了)

講演録

「シリアの祖国、文学、女性——小説『歩き娘』を入口に」

講演 サマル・ヤズベク

司会 岡真理 モデレーター 岡崎弘樹 新刊紹介 柳谷あゆみ アラビア語通訳 森晋太郎

---

作成： ワタン研究プロジェクト

編集： 岡崎 弘樹、岡 真理

編集補助： 西道 奎

発行： 2025 年 10 月 26 日

連絡先： プロジェクト・ワタン事務局

projectwatan3@gmail.com

<http://www.projectwatan.jp/>

---

©Hiroki OKAZAKI, Mari OKA 2025